

私の居場所

坂本亮治



「ここに居ていいよ。」亀山の御坊さんはそうおっしゃってください。

穏やかな佛さまの光が包んでいるような本徳寺の趣は、四百年の歴史を刻む大伽藍はもちろんだが、そこに住される寺族や集い詣られる方々のお人柄が創りだしていると思う。

往古の飾磨街道から望む山門は大きく開放され、広い境内の奥には、荘厳で美しい曲線を描く麓の大波を見上げることができる。分厚く黒光りの板を敷き並べた高床の廊下は、幾年もの時代の人々を迎え、支えてきた伝統の風格を感じさせる。正面七間間口の本堂の障子を開けて誘われる百畳大広間は、私の心落ち着く極上空間である。

毎日欠かさず執り行われる早朝の勤行。ご住職・副住職・役僧様そろっての読経に、ご同行の方々と共にご唱和させていただく。先導してくださ

る住職は、常に姿勢正しく、その声明の優雅な響きは平安宮廷はかくの如くか、と至福の時間を過ごさせていただく。この心地よい「雰囲気」は、ご縁の賜物である。



亀山本徳寺・本堂広縁

思い返せば、三年前の癌手術のあと、更年期病に陥り、暗闇のらせん階段を降りる迷い人となった私には、佇む安穩の場所がなかった。何処にいても不安による緊張がとけなかった。そんなとき、境内での朝市がご縁で、初めてこの地に

たどり着けた。おわしますお方も存ぜぬまま、向き合った本堂の入口に書かれていた、「どなたでもお参りください」の文字が、私を救った。「私の居場所」を与えていただいた瞬間だった。

以来、土日曜の朝は、頭の丸いを幸いに、家人の起床前に「出家」(家出！)することとしている。後ろ髪もないので、ひかれぬ。朝日に車を駆け、佛さまに抱かれる「私の居場所」に着座する。夏の暑さも苦にならない。真冬のすきま風も、世間に吹いている風に比べれば、心地よい。なあって無礼を、思えるまで回復した。

還暦小僧が、お寺で「生き方」をならわせていただいている。死んでからでは間に合わないところだった。思いがけないご縁のおかげで、八万四千の佛さまに、私の残り時間を延長していただいている気がする。

蛇尾：回窓会は、まずは老化や薬・病気・手術の自慢？話の花が咲き、次第に自分の葬式や遺言、はてはお墓の準備の話題にまで老人力発揮の盛り上がりも、仲居さんのひと声が宴の締めとなる。

「皆様、玄関にお迎えがまいりました。…… (誰も呼んでないよ！)」

